

【巻頭言】

花菖蒲育種への問題意識

会長 椎野昌宏

冒頭から花菖蒲でなく、先ずジャーマンアイリスについて書きます。2005年3月に日本花菖蒲協会の編集で、誠文堂新光社から[世界のアイリス]を出版したことを想起します。日本のあやめ文化を受け継ぎ、ノハナショウブという単一の種から生成発展した花菖蒲と、ヨーロッパのアイリス文化を具現したたくさんの原種の交配から生まれた複雑な系譜をもつジャーマンアイリスを2本の柱とし、加えて世界各地に自生するアイリスの原種群とその育成品種を3本目の柱とする構成にしました。花菖蒲とジャーマンアイリスの花の比較をし、その舞台である日本と欧米の園芸文化史的側面と美意識の特徴にふれました。

私は以前から、ジャーマンアイリスを20品種くらい鉢植えで栽培してきましたが、7号程度のスペースでは塊茎が発達しないので思うように花茎が上がらず手入れを怠っていました。たまたま思いあって、2~3年前に、横浜山手の記念館‘外交官の家’と本牧にある福祉センターのケアプラザの中庭にそれぞれ8品種ずつ株分け苗を移植したところ、環境に合って、のびのびと生育し、5月に素晴らしい花を咲かせ、来館者や歩行者の目を奪い、好評を得ました。その中の2品種にジャーマンアイリス栽培以来初めての感動を受けました。黒に近い濃紫の深みある色感とピロード光沢を輝かせる、堂々たる花姿のダスキー・チャレンジャー(Dusky Challenger)【写真】と、フリルをひらめかせ貴婦人のドレスのようにソフトな白い色調と洗練された花容のメスマライザー(Mesmerizer)は長年にわたる欧米のジャーマンアイリス育種の到達点ともいえます。両者ともダイクス・メダルの受賞作であり、セルフ・タイプ(Self Type)で、上弁と下弁が同色であるため、花菖蒲愛好家にとって違和感を抱かせません。特にダスキー・チャレンジャーは、近年愛好家による人気投票のトップを続けている優秀花であります。自分が栽培してきた株からこのような美質を見せ付けられると、私自身、花菖蒲栽培の専門家としても頭を下げざるをえません。ひるがえって花菖蒲育種活動の現況と将来への展望にいささか不安を感じます。

私たちは江戸古花の宇宙や初霜、近代花の舞扇や美吉野、現代花の創世記や出羽の里、米国種のグレート・モガールやスティプルド・リップルスなどの人気品種

を株分けによる栄養繁殖(クローン増殖)によって栽培保存しています。つまり性を介した生殖による実生増殖によらず、同じ遺伝子コピーを持ちながらも生理的に独立している株を増やし続けています。宇宙などは160年以上もの長い間、そのクローンを維持してきているのです。ところが近年になって、植物を劣化し、死滅させるウイルスや病害が増えてきて、株を健康な状態で増やし、保存することが難しくなってきました。一度有害ウイルスに感染すると、そのウイルスを保持したまま増殖されることになり、品質も落ち、増殖力も激減することになります。クローン増殖の時間スケールはかなり長いといわれていますが、花菖蒲などの園芸種はその後の栽培環境や条件の変化により、短命に終わってしまいます。よってその個体群の長期的な維持や遺伝的な変異性の確保のためには、有性生殖の種子による繁殖も積極的に行われなければならないのです。このことは私たちの花菖蒲園芸の正しい道筋として次の点を示しています。

- 1) 病害を克服できる強くて丈夫な品種を作り出す。
- 2) 近年の温暖化気候に対応しうる耐暑性品種を生み出す。
- 3) 日本の気候や土壌条件に適応しかつ美しさを誇るジャーマンアイリスに負けないように、花菖蒲の潜在的な美を追求し引き出す。

このため、花菖蒲の日本の育種家は少なくなっていますが、それらの人が作出する新花を協会の機関を通して、全国会員に分譲し普及させる。また先任の育種家によって、次代の育種家の指導養成を行っていただくことが必要となってきました。地道な活動になりますが、花菖蒲を伝統花として後世に残していくため、誌面を通してご理解ご協力をお願いします。

